

生活行為としての掃除の在り方に関する一考察

—家庭および学校教育における掃除の位置づけを概観して—

亀 崎 美 苗

埼玉大学教育学部生活創造講座家庭科分野

キーワード：生活行為 掃除 小学校 家庭科

1. はじめに

学校での清掃活動は日本においては生徒が行うことが習慣化しており、学校掃除と呼ばれて少ないながらも研究報告がある。本論文では、これらを概観した上で、住教育の観点から学校掃除の在り方について考察する。実は掃除は家庭科住領域において取り上げられる項目である。学習指導要領の内容としても、小学校段階で整理・整頓および掃除が盛り込まれており、教科書ではこれらについて学習した後、課題実践により出てきた不用品等を分別するなどして環境に配慮した生活について学ぶ流れとなっている。

本研究では、学校が児童・生徒にとって学びの場であるとともに生活の場でもあることを踏まえて、生活行為としての掃除の在り方を考察する。個別の住まいのレベル差あるいは地域差は元来あり、それが家庭科における住領域の取り扱いの困難さと捉えられてきたが、世帯形態の多様化と経済格差の進行する現代においては、学校生活が一定レベルの生活スタイル、生活体験を得る機会を担保する場でもあることを考えるとき、そこでの行為の在り方を検討することは重要と思われる。

2. 研究方法

本研究では、先ず、家庭で行われてきた掃除そのものについて文献より考察する。次いで、文献および既往研究より学校における清掃活動の歴史を整理し、現代にいたる流れと今日的課題について考察する。最後に、二つの内容の分析から得られた結果をまとめ、住教育という視点で見た学校掃除の意義と今後の課題について述べる。

3. 結果および考察

3-1 家庭における掃除という行為についての解釈

沖原編著による『学校掃除—その人間形成的役割—』(1982)の第4章「家庭のしつけと掃除」において岡本は、もともと明治以前から家庭のしつけとして掃除が行われ、その根拠として清潔を好む日本人の民族性があり、汚れを穢れとみなし禍をはらう行為として掃除を行い、これが即ち神仏を敬うことに通じていたこと、また、伝統社会において家庭の仕事あるいは家業の習得を目指した生活技術伝承の一環として、掃除の技が引き継がれてきたことを指摘している。これらはしつけとしての掃除の捉え方ではあるが、単なる技能の習得に留まらず、働くことへの向き合い方、

生きる姿勢にまで及ぶことが、幸田露伴が娘文に伝授した「格物致知」の教えによる掃除道具の扱い方、所作の良さまでをも求めたしつけによくあらわされているとも指摘している。このように、掃除のしつけが、伝統社会における家庭のしつけの基礎的なものとして存在し、なおかつ重要視されていたことが読み取れる。また、今（1971）は考現学において風俗採集として男女別の日用品を図や絵で示しているが、その中に女性の持ち物として掃除道具一式が含まれている。このことから、家庭における仕事の中で、掃除が炊事・洗濯と共に女性にとって重要な家事の一部であったことをうかがい知ることができる。

3-2 戦後の家庭生活の変化にともなう掃除の変容

戦後における社会の変化は、伝統的な「家」を崩壊させ、家庭生活にも大きな変化をもたらした。昭和22年の学習指導要領（試案）家庭編では、個人を尊重した民主的な家庭建設を目指すことが謳われている。各世帯単位では高度経済成長に伴う家財および家電の所有率が上昇し、家事負担を軽減する商品の開発が進められた。また、住まいそのものも洋風化が進み、本来の日本家屋が持っていた和室の連なりと縁側から庭に続く開放的な間取りが、子供室を中心にプライバシー重視の個室確保へと変化してきた。和室と板間・縁側等で主に構成されていた伝統的な和風住宅では、掃除は、ハタキがけ→塵埃を箒で外に掃き出す→板廊下等を拭く→乾かすの順で行われていたが、外部に対して閉じられがちな空間となった現代の住まいでは、換気に気を配り塵埃等を掃除機で「吸う」ことが欠かせない行為となっている。このように、住宅自体の物理的な制約から、伝統的なしつけとしての掃除スタイルの維持が困難な状況にあるともいえよう。

一方、家庭のしつけに対する意識の変化も指摘されている。すなわち、高度経済成長期には進学率も上昇し、子供の日常行動に対する親の注意の対象が「勉強」最優先となり、「家事・家業の手伝い」が著しく低い傾向を示したことが調査結果より明らかにされている（岡本，1982）。ただし、持ち物の整理・整頓に対しての注意は比較的高く、これは当時の大量生産・消費による、ものの増加に伴い、必要に迫られていた結果と思われるが、このことは、ものであふれる現代の住生活において更に重要な課題となっている。いずれにしても、家事あるいは家業手伝いの中の基本であった掃除という行為は、掃除機など新たな掃除道具の普及に伴い伝えられる技能として扱われることが減り、親からみたしつけ意識からも下位に置かれる状況にあった事実が認められる。

3-3 現行の学習指導要領により家庭科で扱われる清掃（そうじ）の実際

先に見た通り、家庭における掃除の扱いは、日常的なしつけとしての重要な位置づけから、戦後の社会および生活を取り巻く変化により、負担の軽減とともに親の意識からも遠のき、日常の種々の生活行為の中で埋没していったことが明らかとなった。その一方で、戦後の教科として新たに設置された家庭科においては、掃除・片づけに関する記述がその設置当初からみられる。本項では、掃除をめぐる現状について、小学校家庭科教科書の分析から把握することを試みる。平成20年の小学校学習指導要領改訂において定められた現行の家庭科教科書（2社より出版）の清掃の取り上げ方について、主として項目立てと表現手法の詳細を表1に示した。

各社の項目を比較すると、構成にはやや差があるものの含まれる内容はほぼ共通しており、表現の仕方も共通する点が多くみられる。具体的内容について以下にまとめて示す。

- ・単元構成では、A社では整理・整頓と掃除が1単元にまとめられており、さらに環境に配慮し

た生活の具体的内容へと続く。B社では2つの単元に分けられており、整理・整頓から環境配慮につなげて1単元とし、そうじの単元は独立している。

- ・2社とも共通した掃除の手順として、汚れを調べる→計画する→準備する→掃除をする→かたづける→ふり返るを示している。A社では巻末に雑巾のしぼり方を写真入りで掲載している。
- ・2社とも掃除の仕方として、掃く、拭く・擦る、はたく、吸い取る（掃除機使用）を挙げている。
- ・家庭の掃除としながら、導入から内容に至るまで、表1に示す通り学校生活上の事物が取り上げられ、写真を示しながら具体的な説明がなされている。

以上のように、現代では、掃除が家庭でしつけられ身体にしみ込んだ行為ではなく、教科書で手順を理解し実践するものとして扱われていることがうかがえる。さらに、教科書を見ながら学習する際には、学校生活をイメージする写真等が多用されており、学校での体験に依拠しているとも考えられ、なおかつ児童は学校で毎日掃除をしている現状がある。

表1 小学校家庭科教科書における整理・整頓および清掃の項目および内容

p	A社 (全127ページ、1～14項目)	p	B社 (全113ページ、10項目＋7項目)
44 -45	6 物を生かして住みやすく (1) 身の回りの物や生活の場を見つめよう (子供部屋の机回りの雑然とした状態、片付いた状態〈写真2枚〉)	25	4 かたづけよう身の回りの物 〈写真：教室後ろの棚への収納風景〉 (1) 身の回りに目を向けよう 〈写真：家庭の学習机回りの散らかっている様子〉
46 -47	(2) 身の回りをきれいにしよう 1 整理・整とんをしよう (道具箱の整理・整頓手順〈写真：道具箱〉)	26	(2) 整理・整とんをしよう (道具箱の整理・整頓手順〈写真：道具箱〉)
48 -49	2 よごれに合わせてそうじをしよう (掃除の手順〈写真：調理室の流し〉)	27	整理・整とんの計画と実践例 〈写真：整理・整とんした身の回り〉
50 -51	3 物を生かしてごみを減らそう (イラストによる7Rの説明) (3) 物を生かして快適に生活しよう (活動の記録〈片づけ後の室内写真〉)	28 -29 74	(3) 物を生かすくふうをしよう (写真、イラストによる3Rの説明) 3 クリーン大作戦〈写真：家での屋内掃除風景、ガラス拭きと掃除機かけ〉
		75	(1) そうじのしかたを見直そう 学校のよごれウォッチング（昇降口・玄関、教室、手洗い場〈写真3枚〉）
		76 -77	(2) そうじのしかたをくふうしよう (掃除の手順と実行、イラスト説明)
125	(確認事項) ぞうきんをしぼる 〈絞り方の写真3枚〉	86	不用品を生かしたそうじの工夫 (材料と方法のイラスト4例)

3-4 既往研究に見る学校掃除の歴史的変遷と現在の状況

日本では、仏教的思想あるいは儒教的教えに基づき、清掃は精神的な活動として捉えられ、重んじられてきた歴史がある。そのため、学校における清掃活動が生徒によって行われることが習慣化されてきた。石井（1976）は、明治14年の文部省および各県の小学校教員心得において学校を清潔に保つことは教員の心得とされており、生徒に学校の掃除を課すべきであるとはされていない点を指摘している。しかし、実際には多くの学校で生徒が掃除を行っていたことが、各地の教育史、学校沿革史などの記述より明らかにされており、これは「勤労の美風を植え付ける」主

旨であったとも述べられている。明治中期には三島通良を中心に学校衛生の概念が取り入れられ、身体検査、学校医設置などとともに「学校清潔方法」(明治30年)が出され掃除の方法についても規定が設けられた。しかし、この後、戦前期には学校掃除を生徒にさせる必要性について世間を巻き込んだ議論があった。これは衛生学的な視点から掃除を捉え、子供に掃除をさせることの是非が問われたことと、学校掃除中の事故から安全面を懸念しての議論であった。このような議論はありつつ、児童・生徒による学校掃除は戦後の民主化教育においても揺るぎなく継続されてきた。戦後の教育において自主性を重んじる視点からは、戦前教育に見られた指導的立場からの指揮下におかれる、全体主義的な活動として受動的に行う清掃活動に対する警戒と、一方では清掃活動も成長を促す機会と捉えて指導しようとする立場からの議論が認められる。このような中で、竹内隆夫が子どもの「心の成長」を意識して考案した「自問清掃」を平田ら(2008, 2013)は指導実践とともに教師成長と結び付けて考察を行い、一連の成果が報告されている。単なる「無言清掃」とは異なる「自問清掃」の段階的発達の中に、掃除活動を空間と結び付け公共物への「感謝」に気づく段階が存在することは注目すべき点と思われる。それは掃除という行為そのものと主体的に向き合い、自ら建物の使い手として維持管理意識に目覚める可能性のある段階と考えうるからである。今後懸念される社会問題として諸施設の老朽化が挙げられるが、施設の使い手であるとともに維持管理者の一員としての自覚が芽生えることを期待しうる機会といえよう。

一方、2008年(平成20年)の学習指導要領 特別活動編に清掃の教育的意義とその実践についての記述が初めて登場し、ここでは、当番活動等の役割と働くことの意義を理解するものとして清掃が挙げられている。衛生面に重点を置いてきた学校掃除の位置づけに教育的意義が明記された点は注目に値するものの、生活行為としての掃除そのものの意味、方法、手順等それ自体が変化するものでもない点は指摘しておきたい。さらに、大竹(2016)は、小学校において教員が学校掃除の年間指導計画を立て、「出前授業」や「チェックシート」を活用した指導実践を行い、児童の習得状況を把握した事例研究を報告している。本報告は、実際に小学校において掃除の年間指導計画を立てて実践を行い、その効果を把握した研究であり、学校における掃除の内容そのものを検討した研究として今後の展開が期待される。本研究の成果として、1年間の最初に児童、教師とともに掃除と掃除指導の基本を確認することの重要性、さらに指導に際して年間指導計画を立てることの有効性が指摘されている。その上で、生徒の掃除技能の向上とともにメタ認知力の向上を認めた点を明らかにしている。このことは生活行為としての掃除技能の定着が教育的意義に通じることを示唆しているものと思われる。

3-5 校舎および学校生活の記憶と掃除

学校の施設環境整備は教育上必要欠くべからざる事柄であるが、日本においてハード面の整備が図られたのは近代以降すなわち1872年(明治5年)の学制発布以降である。これより、文部省から学校建築に関わる種々の指導が行われ、建設図および設計大要などが模範として示された。1923年(大正12年)の関東大震災発生以降は防災的見地から鉄筋コンクリート造の校舎が増加したが、その後は戦時体制に向かい再び木造校舎の建設が増加していった。戦後は、建築基準法(1950年、昭和25年)の制定により、学校は鉄筋コンクリート造の耐火構造とされるに至り、1970年代以降、木造校舎は減少の一途をたどった。写真家武田信夫による写真集『懐かしの木造校舎』(1984)において、武田は出版までの4～5年の間に多くを撮影した小学校70校の木造校舎を紹介している。この写真集では、風景に溶け込む木造校舎全体の佇まいを収めたものと共に、学校内部とそ

こでの生活の様子を見取ることのできる写真も多く含まれている。その中から、教室等の内部の様子と、掃除風景の写真を対象に読み取れる事象を把握することを試みた。(図1, 2) これらの写真の中には、教室内の机を移動させて箒で床を掃き、雑巾がけをする様子とトイレ掃除にも取り組む児童の姿が収められている。

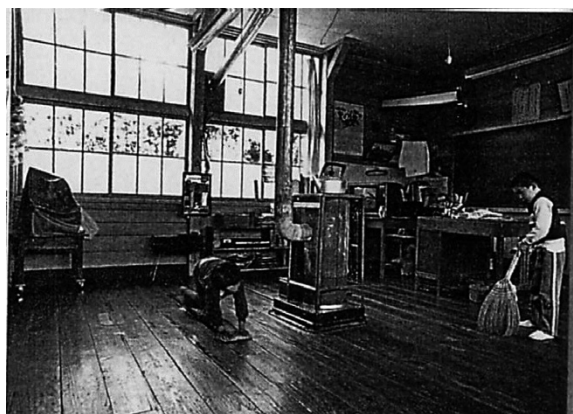


図1 教室での掃除の様子

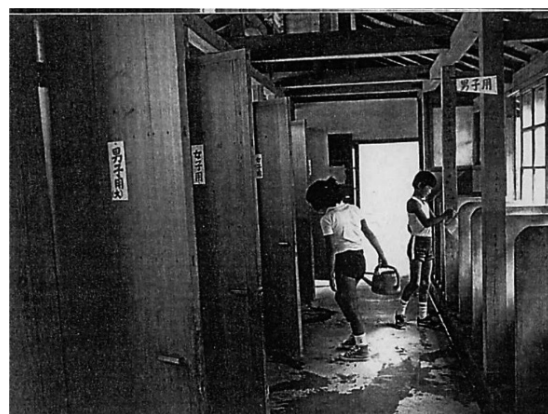


図2 学校での便所掃除の様子

(図1～2 武田信夫 1984 p.123, 139より転載)

また、写真集には、木造校舎の写真から想起された5人のコラムが掲載されており、その中の一編、詩人草野心平氏の「エレヂー」では、遠路や雪の日など通学の苦しかったことが懐かしさを生むと振り返りながら、母校での学校生活の思い出と共に「教室の雑巾がけなどは1年生のときからやらされたが別に苦にはならなかった。」との一文がある。この描写からは、学校掃除に伴うと思われる雑巾がけが、日常化された行為として定着していたことがうかがえる。また、同様のコラムで写真家三木淳氏は「掃除当番が懐かしい」のタイトルで掃除当番の仕事ぶり、学校生活での教師からの評価を含む掃除の存在感の大きさを懐かしみながら描写している。

また、本写真集の作者である武田は、あとかぎの文章において、木造校舎の撮影に際して出会った複数の校長先生から、校舎と掃除に対する思いを聞き伝えている。そこでは、山から切り出された自然の材料で作られている木造校舎は「生きて」おり、掃除や手入れを怠ると「材料が死に校舎も死んでいく」と表現されている。さらに武田自身が「子供達は掃除によって、木の生命と向かい合う。よく磨き込まれた柱の一本一本、廊下の板の一枚一枚にしるされた年輪、その一つ一つが彼らにいったいどれだけのものを教えるだろうか。」と述べ、学校掃除により校舎と直に触れ合った児童の成長に思いを馳せている。

武田自身は、木造校舎に出会った時の感情を、探し続けた「心のふるさと」を見つけたと描写しており、他のコラム筆者の文中にも「懐かしさ」とともに独特の美しさ、品格、ぬくもり、あたたかさといった語が登場する。さらに、コラムの執筆者の一人である建築家の松山巖氏は、木造校舎に限らず、建物は工事を終えた時から息をしはじめ、日々使われ、人々によって成長していくに違いないと述べている。このように、木造校舎のみならず、建物が使われながら「成長する」と表現されることは、それらに対する手入れ、すなわち掃除も含めた使われ方の持つ力を表していると考えられる。

4. まとめ

本研究では、家庭における掃除と学校掃除とをそれぞれ生活行為として捉え、その変遷および現状について考察を行ってきた。家庭での掃除は、従来は基本的なしつけとして親から子にその技能が伝授され、日々繰り返し行われる行為であったが、生活の変化にともない掃除の形態も変化し、かつて重要視された道具の扱い方や所作の美しさなどを追及する厳密さは失われ、それに伴い日常生活における定着度も低下してきた。また、親の側の掃除に対する意識が希薄化したこともあり、家庭での掃除に対する児童の知識及び実践上の細かい技能並びに生活上の重要度認識は総じて低下したと言わざるを得ない現状がある。

戦後に設置された教科としての家庭科では、当初から掃除の項目は見られるが、現状においても学習指導要領に明記され、教科書で取り上げられる項目であり、かつては家庭でのしつけの範囲内で当たり前に行われていたと思われる「雑巾の絞り方」が最新の教科書に記載される事項となっている。このように、掃除の基本的技能も学校で教わる項目となる現状において、子供にとって家庭での日常的な掃除は習慣化されておらず、さらに親からは、以前持っていた美意識や清掃行為の精神性を伝授することも難しくなっているものと考えられる。

一方、これまでの学校掃除に関する研究のレビューより、学校掃除が行われ始めた当初は掃除の手順、身なりなどに公的な指導がみられたが、学校での掃除においては、もともと精神性が重視され、教育的意義がより強調されてきた。その結果、掃除そのものは定型的に行うものの、家庭のしつけとして行われていた基本的な技能の伝授、道具の取り扱い、所作の美しさといった細やかな面は歴史的な経緯を見る限り各自に委ねられていたようである。家庭での掃除のスタイルが変化し、旧来からの道具を用いた技能の伝達が難しい現状を踏まえると、学校である程度それらを行うことが期待されているとも考えられる。

以上見てきたように、現在の住生活行為としての掃除は、家庭において子供に一定の技能を伝授し日常的な定着を図ることが難しい現状があり、家庭科教育および学校掃除の果たす役割は相対的に大きいと考えられる。しかしながら、教科としての家庭科は小学校5年次からの履修であり、一方、学校掃除は入学後から段階的に経験していくものの確立されたプログラムは未導入である。只し、定型化された旧来からの掃除スタイルをすでに学校が独自に工夫し、指導している場合も認められる。学校掃除に年間指導計画を導入した小学校の実践事例研究より、その効果が報告されていることから、今後更なる指導の工夫が望まれるところである。

本研究では、生活行為としての掃除に着目し、社会の変化にともなう家庭、学校および家庭科教育における掃除の位置づけの変化を把握し、現状を明らかにした。最後に、これらの現状を踏まえ、今後、持続可能な社会を目指しながら豊かな生活を送るために検討していくべき点を以下にまとめる。

第一に、旧来の掃除スタイルは掃除道具の材料も含めて全てがいわゆるエコであり、学校建築自体が木造校舎で占められていた時代には、掃除は直に木に触れ、手入れをする感覚を養える機会であり、自然との親和性の高い行為であった。また、伝統的な生活について扱い、生活文化に気づくことは次期学習指導要領において指摘されている事項でもある。環境を意識した生活に向けて、伝統的な掃除スタイルとそれらが内包していた住生活文化ともいえるべき精神性についても理解を深めるべきであろう。

第二には、今後の社会を担う子供たちに、建物の公共性と維持管理の必要性を知る機会を設けて、スペースの管理意識を高める必要があるものとする。持ち物が増えた今では、量及びボリュームを含めたモノとスペースの維持管理並びに運営（マネジメント）は生活上の重要な課題であり、快適さを左右するだけでなく掃除のしやすさという点でもそれらの関係性を更に検討する必要がある。モノとの関わりに着目し、空間そのものを管理することから掃除へと結び付けることも重要と思われる。

第三には、具体的な住生活行為である掃除を題材として、保護者および地域を含めた住教育の場を提供することにより地域全体の清掃技能の向上を図り、学校の維持管理にも生かしていくことを目指すという提案である。各家庭においても日頃から掃除、片づけの悩みは深い。学校が主導して専門家と連携するなどしながら、保護者も対象にした学習の場を学校において設ける機会を持つことが有効と思われる。空間管理の必要性和具体的な方法を学ぶ機会を契機として、学校の維持管理および清掃活動等への保護者および地域住民の参加が活発となることを望みたい。

なお、これらはすべて広義の住教育として扱っている内容であり、掃除を含めた今後の学校における新たな取り組みが住生活上の行為として定着し、地域全体が持続可能で快適な居住生活を送ることに繋がるような、新たなプログラムの開発が期待されよう。

引用および参考文献

- 石井 均（1976）「明治以降の小・中学校における学校掃除の研究」『広島大学教育学部紀要』第一部25, pp.49-59
- 沖原 豊・二宮 皓・石井 均・養祖京子・米村佳樹・岡本恭枝・大塚 豊・川地洋一・西村重夫（1977）「各国の学校掃除に関する比較研究」『日本比較教育学会紀要』3, pp.37-46
- 沖原 豊（1982）『学校掃除』学事出版株式会社
- 平田 治・土井 進（2008）「教員養成段階における「自問清掃」指導の意義と成果」『信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 教育実践研究』9, pp.145-154
- 浅見美之（2010）「近代以降における学校掃除の一考察—大正期における学校掃除議論をめぐって—」『上越社会研究』25, pp.31-40
- 平田 治（2013）「学校掃除「自問清掃」実践者の教師成長：〈自己成長感〉の連関的形成」『教師学研究』12, pp.11-20
- 平田 治・土井 進（2013）「学校掃除「自問清掃」の発想原理と方法的原則」『信州大学教育学部研究論集』第6号, pp.37-50
- 大竹美登利・藤原玲子（2016）「学校掃除で育成される力とその課題」『教員養成カリキュラム開発研究センター研究年報』15, pp.7-16
- 文部科学省（2008）学習指導要領，小学校学習指導要領解説 家庭編
- 平成26年文部科学省検定済（2015）『わたしたちの家庭科5・6』開隆堂出版
- 平成26年文部科学省検定済（2015）『新編 新しい家庭科5・6』東京書籍
- 菅野 誠（1973）『日本学校建築史』文教ニュース社
- 武田信夫（1984）『懐かしの木造校舎』作品社
- 今和次郎（1971）『考現学』ドメス出版

（2017年3月31日提出）

（2017年4月17日受理）

A Study on the Way of Cleaning Activities as Living Acts:

An Overview of the Position of the Cleaning in the Home and School Education

KAMESAKI, Minae

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

This paper investigated the meaning of the things that students had to clean at school. The school is a place of learning also a place of living, it is important to consider the way of cleaning as one of daily living acts. First of all, was studied a training of cleaning itself has been done at home. Then, from the literature and previous studies, summarized the history of the clean-up activities in the school, discussed today issues and the flow leading to modern. Finally, summarizes the results obtained from the analysis of two of the contents, it has been described future challenges and significance of school cleaning as seen from the perspective of housing education. Handling of cleaning in the home, from an important position as day-to-day discipline, due to changes surrounding the post-war society and living life, to keep away from him from the parents' consciousness along with the alleviation of the burden, has buried in a variety of life activities of day-to-day. Daily cleaning of the school has become a place of valuable experience for the students. It is also important for parents to provide opportunities to learn together for the actively cleaning and maintenance of building at school in the future.

Keywords: living acts, cleaning activities, primary school, Home Economics